慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	徳永里砂著「イスラーム成立前の諸宗教」イスラーム信仰叢書8、国書刊行会、平成24年
Sub Title	Risa Tokunaga, "Pre-Islamic Religions of Arabia", Kokusho-kankokai, Co. Ltd., 2012
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2012
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.3 (2012. 7) ,p.149(503)- 151(505)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120700-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

徳永里砂著「イスラーム成立前の諸宗教」イスラーム信仰叢書8、国書刊行会、平成24年

小川英雄

本書の著者である徳永里砂さんは、私のゼミナール（慶応義塾大学文学部史学科考古学専攻）出身の唯一のイスラーム信仰史の研究者である。一九九九年から三年間エジプトのカイロ大学に留学し、慶応に戻ったのち文学博士号を取得された。母校で古代アラビア史の非常勤講師も務められている。

徳永さんの父親は駿河大学で物理学を教えておられ、母親は著名な洋画家であった。論理的でありながら、抒情的な香りも高い本書の背景には、著者の生育歴が大きく影響しているに違いない。

徳永さんは、私のゼミに所属された時から、古代アラビアに興味を示し、私自身が学生時代からシリア、北アラビアのアラブ系諸民族ナバテア人やミトラス教を研究していたことから、非常に印象深い教え子であった。

著者の研究は、当時の日本オリエント史学界においては先駆的であった。その物腰の柔らかさからは想像のつかない行動力と知的探求欲を以って、数々の遺跡やモスクを訪ね歩き、アラビア語に習熟した著者の青春時代は、いまどきの若い女性とはまったくかけ離れていた。アラビア半島の古代史を専門とする研究者は、今でも世界を通じて数少ない。その稀少性からも、本書は注目されるべきである。

冒頭、著者自らが撮影してきたものと思われるカラー写真で、アラビアの遺跡や出土品、現在の街並み、そして香辛料などの産物、ラクダなどが豊富に紹介されている。われわれ日本人にとっては新鮮で、旅情をくすぐるような風景も見られ、序章から引き込まれていく。まず、イスラーム成立前史を研究することの意義が述べられる。著者が紐解いた史料は、古代アラビア語原住民たちの諸文献、碑文、詩文、周辺の国々に残る伝聞、さらに彼らの先史時代の岩絵や土器、構築物である。ヘロドトスをはじめとするギリシャ・ローマの古典書では、アラビアは「幸福のアラビア」と呼ばれたが、著者の示す史料がその根拠を明らかにしているように思える。

本書で触れられる神々の記述は実に興味深い。アラビアの国々では、それぞれ独自の主神を信仰し、国王が祭司を兼ねていた。各都市の中心は、ギリシャと同じように神殿であり、神官たちには女性もいたが、彼らは政治的にも経済的にも大きな影響力を持った。神殿遺跡からは碑文が出土している。また、香炉や香料、貴金属なども奉納されていたことが分かる。墳墓は、岩窟墓（岩屋）と建造物があり、遊牧民と都市の住民とではそれぞれ葬られる場所が違う。人々は偶像を崇拝し、この点で後のイスラームとは大きく異なる。ギリシャ語でステラと呼ばれる人間の姿を象った小型の石柱が出土している。当時の人々は、宗教的禁忌に支配されていたが、旅人たちは、行く先々でその地の神々を礼拝した。第3章では、北西アラビアの諸都市の宗教が扱われる。ここはシリアに隣接しているので、オアシス都市が発達しており、オリエントの他の地方の政治や言語、宗教の影響も色濃い。

第4章以降、隊商や遊牧民たちによって、この砂漠の地の岩壁に描かれた文字や碑文から、彼らの信仰が論じられ、イスラーム以前の一神教について展開されている。彼らの文字は一種類ではなく、南アラビア文字のほか、ナバテア文字、ヒスマー文字、サムード文字などがあり、隊商たちが外部世界の文字の影響を受けながら開発していったものである。

これまで、アラビアで知られた最初の一神教はユダヤ教であるとされていたが、著者は独自に、一神崇拝への傾向をアラビア半島に認めている。それによると、ヒムヤル帝国に「天の主」という唯一神が出現し、三、四世紀にはここに独自の一神教が現れたということである。アラビア半島には、とりわけディアスポラ（ユダヤ人の諸国分散）の影響で、多くのユダヤ人が移住してきてお

り、六世紀には国王ユースフ・アスワル（ズー・ヌワース）までもがユダヤ教徒となり、多神教の神殿は葬り去られることになる。その後、ローマ帝国がキリスト教化すると、国交面からも影響を受け、アフリカから海峡を渡ってアラビア半島にもキリスト教が到来する。ガッサーン族やラフム族など部族ごと改宗する例も生じた。このアラビア半島におけるキリスト教の最初の流布についても本書に述べられている通りで、これは、これまでのキリスト教史書においても言及されることのなかった事象である。古代オリエント史を修めた著者ならではの、古代文化とイスラームの関係性が詳細に述べられている。

イスラーム以前のアラビアの宗教は、偶像崇拝の一言で評されることが多かったが、著者は三世紀以降のナバテア人をはじめとする一神崇拝への傾向をアラビア文字の開発と共に注視し、それがアジア・アフリカの多くの土地で国際化していったことを論じている。

本書は、著者のこれまでの研究成果が見事に統合され、それによって我が国でのこの分野の確立がなされたといっても過言ではない。古代オリエント史上、画期的な書物であると言えよう。